

(対象事業：地域連携強化事業・地域文化資源整備活用事業・ミュージアム支援地域人材育成事業・国際交流拠点形成事業)

事業名：資料が語る日韓交流史の研究を通じたミュージアム事業 ―古代新羅土器と近世薬種業を中心に―

事業者名：博物館国際交流拠点形成事業大阪市実行委員会
住所：大阪府大阪市中央区大手前4-1-32 大阪歴史博物館
TEL：06-6946-0989
FAX：06-6946-2662
HPアドレス：<http://www.mus-his.city.osaka.jp/>



連携事業者名：財団法人大阪市文化財協会
会場：大阪歴史博物館
事業期間：平成21年7月15日～平成22年3月15日

1. 館の使命と本事業の関係

大阪歴史博物館の「使命」におけるキーワードは「都市大阪」であるが、本事業によって、大阪に固有の国際的な歴史・文化遺産に焦点をあてることが可能となる。さらに海外研究者による最新の研究成果をまじえたより広い観点に立ったシンポジウムの開催、実物資料の拝借・展示などを通じて、「都市大阪の歴史」に対する理解を具体的かつ国際的に深めることが可能となる。

2. 企画内容

①事業目的

本事業では韓国の博物館と連携し、日韓交流の歴史に関する最新の研究成果を広く市民に伝える事業を行い、アジアの文化交流の拠点となることを目指したい。大阪は古くから港湾を有する外交・物流の拠点として古代では韓国新羅の土器が目立った出土地であり、近世では道修町の薬種買仲間を中心に、朝鮮を含む輸入薬種をはじめとする全国の薬種流通の中心であった。よって古代の新羅地域にあたり、朝鮮王朝時代（日本の近世に併行）には薬令市が開かれ、朝鮮薬種の流通センターであった大邱広域市一帯を韓国側の交流対象地域とし、韓国国立大邱博物館との連携をはかることとする。

②事業概要

本事業では「古代における新羅との交流」と「近世における薬種業」をテーマとし、以下の事業を実施した。

第一に、新羅土器と薬種に関わる「特別講座」を、11月14日、15日と連続して実施し、本事業をより深く理解できるよう努めた。

第二に、国立大邱博物館の関係者を招いた国際シンポジウムを、上記と同じく、ふたつのテーマで開いた。時期は11月22日、23日であった。

以上の事業では大阪韓国総領事館韓国文化院の後援を受けた。

第三に、国立大邱博物館所蔵資料の借用、展示である。展示資料は現地の新羅土器のほか、薬種筆筒・関連書物である。展示期間は11月11日～12月27日であった。

3. 事業実績

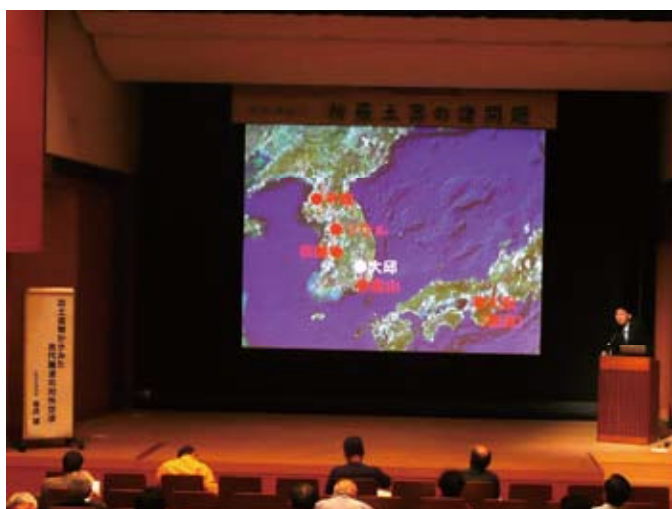
(1) 事業の内容及び日程

I. 特別講座（会場 大阪歴史博物館）

・11月14日：新羅土器の諸問題

報告1 重見泰（奈良県立橿原考古学研究所）「難波宮周辺にもたらされた新羅の土器」

報告2 寺井誠（大阪歴史博物館）「出土遺物からみた古代難波の対外交渉」



特別講座「新羅土器の諸問題」（11月14日）

・11月15日：くすりのまち道修町と朝鮮薬種）

報告1 宮本義夫（くすりの道修町資料館）「道修町と道修町文書」

報告2 八木滋（大阪歴史博物館）「大邱での薬種関連調査」

II. 国際シンポジウム（会場 大阪歴史博物館）

・11月22日：古代の難波と新羅

報告1 大庭重信（大阪市文化財協会）「最近の発掘成果からみた遷都前夜の難波」

報告2 咸舜燮（韓国国立大邱博物館）「新羅の中古期に対する考古学的成果と課題」

報告3 田中俊明（滋賀県立大学）「文献史からみた6・7世紀の日羅関係と難波」

パネルディスカッション 上記3名と重見泰氏による（司会 積山洋）



国際シンポジウム
「古代の難波と新羅」
(11月22日)

・11月23日：近世大坂の薬種業と朝鮮薬種

報告1 安相佑（韓国韓医学研究院）

「薬種からみた韓日交流—朝鮮通信使と大邱薬令市を中心に—」



国際シンポジウム
「近世大坂の薬種業と朝鮮薬種」
(11月22日)

報告2 渡辺祥子（元大阪市立大学 COE 特別研究員・博士）「近世大坂における薬種流通」

報告3 八木滋（大阪歴史博物館）「近世大坂と朝鮮薬種」

パネルディスカッション 上記3名による（司会 大澤研一）

Ⅲ. 国立大邱博物館所蔵資料の借用、展示。大阪歴史博物館にて、展示期間11月11日～12月27日。

- ・ 大邱広域市達城舌化里古墳群出土の新羅土器（展示場所：8階特集展示室）
- ・ 薬種筆筒・関連書物『薬性歌』（展示場所：9階常設展示室）



薬種筆筒(左)と『薬性歌』(右)
の展示：9階常設展示場
(11月11日～12月27日)

(2) 参加者の数

参加者人数 延べ 26,287人

内 訳：特別講座11月14日：52人。同11月15日：38人。

国際シンポジウム11月22日：130人。同11月23日：67人。

常設展示場（8階・9階）への展示期間中の入館者：26,000人。

(3) 事業により作成した印刷物等

① 宣伝用チラシ：5,000枚

- ②資料集『資料が語る日韓交流史の研究を通じたミュージアム事業－古代新羅土器と近世薬種業を中心に－ 国際シンポジウム 資料』：600冊
- ③記録集『資料が語る日韓交流史の研究を通じたミュージアム事業－古代新羅土器と近世薬種業を中心に－ 成果報告書』：700冊

(4) 実施事業に関する新聞記事等

○読売新聞 平成21年11月19日朝刊

大阪歴史博物館で開く11月22・23日の国際シンポジウムと、8階・9階での展示の紹介記事。

○大阪日日新聞 平成21年11月16日朝刊

大阪歴史博物館にて新羅土器の展示と、国際シンポジウムの紹介記事。

○テレビ、関連誌等

4. 事業の成果及び今後の課題（参加者の意見を含む。）

今回の事業により、韓国国立大邱博物館との交流を大きく進めることができた。先方は、2010年7月19日に館をあげたりニューアル・オープンを予定しており、新たな展示計画において、当館所蔵資料（服飾、屏風など）の活用を予定しており、すでにその調整も進んでいる。事業終了後、このような新たな交流の展開をみたことは、本事業が1回きりの展示やシンポジウムに終わらないものであったことを示しており、継続的な交流の基礎を築くことができた。

また、この事業をきっかけに外国語環境の重要性が再認識された結果、館内放送の一部を韓国語、中国語、英語で流すことになった。

以上が主たる成果である。

ただ、課題もいくつか残った。まず、事前の広報が不足していたことにより、参加者が少なかったことが挙げられる。この点は複数の参加者から指摘があった。この反省を踏まえ、次年度の当館事業では計画的かつ意欲的な広報を展開することになっている。

さらに、よりいっそうの外国語習得が望まれることも、新たな課題となった。本気で国際交流を考えた場合、この点は避けて通れない課題であろう。